

和漢脩身書

山内賁編纂

四

東京師範學校稻垣千穎先生閱正  
竹溪山内賁先生編纂

和漢

身書

類脩身  
屬冊  
函行  
級五  
五

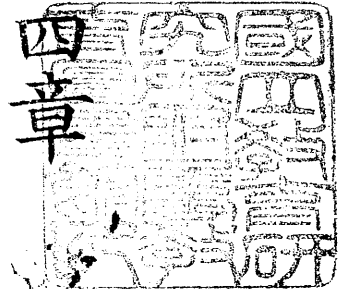
文學社發兌



昭和十六年十月十三日納付し林再刻

和漢修身書卷之四

東京師範學校  
圖書部  
第四卷



稻垣千穎閱正  
山内賁編纂

○仁義禮智信

是を五常といふ

○五常は人の性にして萬善の根

和漢修身書卷之四

源なり、

仁とは人を愛し物を憐むをいふ、

義とは、宜しきに従ひて事を處するをいふ、

禮とは、次序品節あるをいふ、

智とは、善と惡とを知り分くる

をいふ、

右を四徳といふ、

信は、此の四徳に實あるなり、

○朱熹曰、己か心を盡すを忠とし、

己を推して、人に及すを、恕と爲す、

○佐藤坦曰、人を責むること深き

者は、必自恕す、己を責むること深

き者は必薄く人を責む

○范純仁曰、人至愚なりと雖、人を責むるは明なり、聰明なりと雖、己を恕するは昏し

○呂本中曰、君に事ふるは親に事ふるか如く、官長に事ふるは兄に事ふるか如し

○程頤曰、此の邦に居ては其の大夫を誹らすといへる、此の理最好し

○呂本中曰、官に當る法、唯三事あり、曰清、曰慎、曰勤、此の三の者を知れば、身を持する所以を知る

○禮義あれば、貧賤なりと雖、人亦之を敬仰し、禮義なければ、富貴な

りと雖、人亦之を鄙賤す。諸儒論小學

○荀况曰、幼にして敢へて長に事へず、賤にして敢へて貴に事へず、不肖にして敢へて賢に事へざるは、是人の三不祥なり。  
○人譽むれば我謙す、又一の美を増すなり、自誇れば自敗る、又

一の毀を増すなり。續小兒語

○范益謙曰、人書信を附せは、開拆して沉滞すべからず、

○又曰、凡人の物を借りては、損壞して還すべからず、

○顔之推曰、人の典籍を借らは、皆須らく之を愛護すべし、

○佐藤坦曰、多言すること勿れ、多言すれば、己の業を怠るのみならず、人を妨ぐることもあり、慎むべし。

○凡童子は、常に口を緘して静黙す。――輕忽に言を出すこと勿れ。

童子  
禮

○張思叔曰、字畫は必楷正、容貌は必端莊、衣冠は必肅整、步履は必安詳、居所は必正静なるべし。

○胡安國曰、事に臨みては、明敏果斷を以て、能く是非を辨す。

○古語に曰、後生才の人、に過くる者は畏るゝに足らず、惟書を讀み

て尋思する者、是畏るべし、  
○室直清曰、小人は眼前の利を見  
て之を悦ひ、君子は未然の害を見  
て之を恐る、

○細事と雖、亦まさに難きを以て  
之を處すべし、忽にすべからず、況  
んや大事をや、  
録 讀書

○貝原篤信曰、事を爲すには深く  
思案をこらしめて、輕率に決定すべ  
からず、

○天子より庶人に至るまで、孝に  
終始なくして、患の及はざる者は、  
未これあらず、  
孝 經

○舟にして淤かす、道にして徑せ

す、身は父母の遺體なり、之を行ふに敢へて敬せざらんや、小學詩禮

○愛敬は、人倫を厚くする道なり、父母を愛敬するは、又其の本なり

慎思錄

○佐藤坦曰、臨時の信は、功を平日より重ね、平日の信は、効を臨時に

収む、

○貝原篤信曰、人の誠ならざる所は、多くは言の上にある、信を守るには、言語に心を用ゐて、實を以てすへし、

○松平定信曰、學問の道は、唯五常五倫を守り、善を以て不善を爲さ



るにあり、

○貝原篤信曰、人の學問する所以の要二つあり、其の知らざる所を知り、其の己よ知る所を行ふなり、

○又曰、技藝は譬へは木の枝葉なり、學問は譬へは木の根本なり、

○書を讀むには、首として志を立

つるを要す、志を立つるには堅き

を貴ふ、堅くして恒あれば、其の學必

成る、讀書心法

○王守仁曰、志立たずしては、天下に成るへき事なし、百工技藝と雖、志に本つかさる者あり、

○凡人志ある者は、遂に能く礪磨

一て以て素業を成す、顔氏家訓

○卜部兼好曰、己を約に、侈を却け、財を貪らす、貴を慕はす、心を專に、して道を學は、終に其の志を成すを得、

○張知伯の曰、人の常情、儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは

難

○貝原篤信曰、衣服は儉素にして、飾少く、世の常にして、賤からざるを宜しとす、

○又曰、質樸に過ぎて、穢はしく、野鄙なるも、惡し、

○又曰、貧しき人も、務めて垢つき

穢れざるを用るる一

○心に暫くも正理を離る一から  
す、身に暫くも正道を離る一から

す、  
録 讀書

○密室に坐するも、通衢の如くす、  
心を馭するも、六馬を馭するか如  
くすれは、以て過を免る一  
録 讀書

○張思叔の坐右の銘に曰凡語は  
必忠信、行は必篤敬、飲食は必慎節  
す、

○古語に曰善に従ふは登るか如  
く、惡に従ふは崩るか如く  
學 小

○呂本中曰一行一住一語一默須  
らく道に合はんことを要す一

○世に處するには多言を戒む多

言なれば必失言あり治家格言

○喜に乗して多言すべからず快

に乗して輕易に行ふべからず讀書

録

○性躁かしく心粗暴なる者は一

事も成すことなしく心和き氣平な

る者は百福自集る菜根談

○葉仲圭曰躁擾輕浮なれば知る

所の者も忘れ易く守る所の者も

失ひ易し

○蘇頌曰人生は勤むるにあり勤

むれば匱乏からず戸の樞は蠹せ

す流水の腐らざるは是其の理なり

○貝原篤信曰、富める人も美麗を好みて、無用の服を多く造るゝか  
らす。

○君子は、人の美を成して、人の惡を成さず、小人は之に及ず。論語  
○君子は、言を以て人を擧げず、人を以て言を廢せず。全上

○後陽成天皇曰、難の中にて難を樂しめは難なく、貧の中にて貧を樂しめは貧なし。

○林和靖曰、心清からずしては、以て道を見ることなし、志確からずしては、以て功を立つることなし。  
○惡を爲るは、駿馬に乗りて坂を

走るか如し、鞭策を加へずして、是亦制すること能はず。畜徳録

○胡安國曰、怒を忍ひざるは、争の基にして、儉約ならざるは、困窮の本なり。

○怒れは横語多く、喜一は狂言多し、戒めざる一けんや。續小兒語

○陳希夷曰、喜怒の輕きと重きとを擇はずしては、一事も成ることなし。

○貝原篤信曰、道學なきときは、根本立たず、技藝なきときは、事に通せず。

○書を讀み、學問する所以は、本心

を開き、目を明にし、行を正しくせ  
んことを欲するのみならず、顔氏  
家訓  
○世人書を讀みて、但能く之を言  
へども、之を行ふこと能はず、同上  
○呂本中曰、大抵後世の學を爲る  
者は、先須らく學を爲す所以は何  
事ぞと理會すべし、

○人已の才能を頼みて、言語容貌  
に顯はす者あり、其の小なること知  
るべし、讀書  
録

○荀况曰、人を傷る言は矛戟より  
甚し、況んや紙筆にあらはすをや、  
○范益謙の坐右の銘に曰、人と同  
しく處る時は、己の便利を擇ふべし、

からず

○司馬光曰、誠は妄語せざるより始む

○君子の言は長厚端謹なり、小人の言は刻薄浮華なり、世範

○陶侃常に人に語りて曰、衆人は常に分陰を惜むべし

○今日一事を記し、明日一事を記して、久しきときは自然に貫穿す

呂氏童蒙訓

○今日一理を辨し、明日一理を辨して、久しきときは自然に浹洽す

同上

○人は、其の心を一の種として、何事



にて七、五年七十年七勉むれば、必  
練達の名顯るゝものなり、倭論  
語

○古の學者は己の爲にして、以て  
不足を補ひ、今の學者は人の爲に

して、但能く之を説く、顏氏  
家訓

○谷素有曰、財は本人を殺すに心  
なし、人貪りて自敗亡を取る、燈は

本蛾を殺すに心なし、蛾撲ちて自  
生命を捐つ、

○貝原篤信曰、慾を忍ぶることを  
務むべし、忍ぶとは、忍耐すること  
なり、

○又曰、酒食を過すは、病を生ずる  
の本にして、言を慎まざるは、禍を

起すの本なり

○口腹節あらざるは、疾を致すの本、思慮正しからざるは、身を殺す

の本なり

省心  
雜言

○太田元貞曰、世の學者禍福命ありと言ひ、飲食を肆にして、攝生を誤り、汰侈放逸にして、理財の道を

失ふ、何ぞ放心の人と謂はざるを得んや

○王守仁曰、人の病根は、只是一個の傲の字なり、千罪萬惡も皆此傲より生す

○人身を修むるに、謹みて、愈謙愈約ならば、衆人將に自服せんとす

若服せざる者あらは是妄人なり

從政  
名言

○世間第一の好事は、難を救ひ貧

を憐むに如くはなし、五種  
遺規

○富貴にして禮を好むことを知  
れは、則驕らす、貧賤にして禮を好  
むことを知れば、則志懈からず、曲  
禮

○禮は猶體の如し、體の備らざる

は、君子之を不成人と謂ふ、禮  
記

○佐藤坦曰、過は不敬より生ず、敬

すれば則過自寡し、

○新井君美曰、物を持して、未手

を離れざるに、目既に他に向ふは、

敬心なきの火と知るべし、

○人と並ひ坐しては、肱を横たつ  
す、立つ人に物を授るには跪かす、  
坐する人に物を授るには立たす、  
禮曲  
○尾藤肇曰、人にして、其の人たる  
所以を知らざる者は、之を禽獸と  
いふ、

○伊藤維楨曰、儉は萬善の本なり、  
奢は衆惡の基、唯其の身の成敗の  
分るゝのみに非ず、其の家儉なれ  
は福子孫に流れ、奢なれば禍後嗣  
に傳ふ、

和漢修身書卷之四終





和漢脩身書

山内貴編纂

五